

# JACC 比較文化会報

本部事務局：〒036-8231 弘前市稔町13-1 弘前学院大学 英米文学  
佐藤研究室 Tel.0172-34-5211 内線 216 satoh@hirogaku-u.ac.jp

## 第24回全国大会を振り返って

大会実施委員長（中・四国支部長） 奥村 訓代（高知大学人文学部）

第24回日本比較文化学会全国大会を終えて感じることは、それはこの学会が「21世紀をもっとリードしなければならない」のではないかという使命感と存在意義の再確認でした。

その意味において、シンポジウムの「比較文化：過去・現在そして未来」は有意義なものでした。

また、各分科会においても研究者は勿論のこと、院生や地域の人を巻き込んだり、地域の特徴を掘り下げるといった研究や発表も定着してきたように思われました。

つまり国際学会としての発展またはグローバル化のみならず、同時にアイデンティティの確立や保護という、一見正相反なベクトルの共生が見うけられたからでした。「文化が違うんだ」という「気付きや静観」の時代から共に意見交換し、「経験を共有する」時代を経て、いよいよ新しい共生のスタイルを「創造する」時代に突入したと考えるからです。

21世紀は、多文化共生の時代である、「日本人」的発想や言動では通じない時代でもある、と言われていています。それゆえに、言葉・文化・宗教・・・等、生活や人の存在全てを研究対象とする「日本比較文化学会の役割」の大きさを感じるのは、私だけではないのではないのでしょうか。

（尚、この度は、父の他界（4月30日）のため準備が後手後手になり皆様にご迷惑をおかけしたことをこの場を借りて、お詫び申し上げます。）

## 第24回全国大会総会報告

佐藤幸正

2002年6月8日（土）高知大学で開催された第24回大会では次のような報告がなされ、審議された。

### 一 報告

1. (1)『比較文化研究』発行について：53、54、55号が発行された。

(2) 主な送付先

国立国会図書館、Harvard-Yenching Library、郵政省郵務局、論説資料保存会等

2. 第25回大会について

開催日：2003年6月14日（土）

開催校：京都橘女子大学

シンポジウムのテーマ：「カルチャーとサブカルチャーとの狭間」

3. 支部および研究部会報告

4. 韓国日本文化学会からの連絡

5. その他

## 二 議題

1. 理事の追加について：井上博嗣会員が理事に再選された。

2. 第26回大会について

開催校：北東北支部主管

シンポジュームのテーマ：未定

3. 『比較文化研究』編集について

質的向上を図るため、いろいろ研究してゆくことになった。原稿の受理を拒否するのではなく、指導方針を作る方向で検討することになった。

4. 会計報告：別紙にて報告がなされ承認された。

## 第25回大会案内

日本比較文化学会第25回大会は2003年6月14日(土)、京都橘女子大学で開催される運びになりました。研究発表やシンポジュームなど奮ってご参加下さい。

開催日：2003年6月14日(土)

開催校：京都橘女子大学

問合先：〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34番地

京都橘女子大学文学部英語コミュニケーション学科

北林利治(キタバヤシ トシハル)

電話 075-574-4183(研究室直通)

075-571-1111(代表)

ファックス(大学)075-574-4122

電子メール [kitabaya@tachibana-u.ac.jp](mailto:kitabaya@tachibana-u.ac.jp)

(自宅)〒536-0021 大阪市城東区諏訪2丁目13番17号

電話とファックス 06-6969-8176

電子メール [VZV00407@nifty.ne.jp](mailto:VZV00407@nifty.ne.jp)

## 研究発表希望者へ

1. レジューメをワープロなどで、B5版横書き1枚にまとめて下さい。その際、左右の余白を2センチほど残して下さい。

2. 2003年1月31日必着で上記北林利治宛に郵便書留で送って下さい。

## シンポジューム講師の推薦

次年度第25回大会のシンポジュームのテーマは「カルチャーとサブカルチャーとの狭間」に決定しております。各支部は12月31日までに講師を推薦して下さい。

推薦された講師は上記研究発表1および2の要領で、レジューメを奥村先生までお送り下さい。

## 支部からの報告

### 北東北支部活動報告

2001・6・16(土)

海外研修帰朝報告—アルゼンチンとW. H. ハドソン— 佐藤幸正

## 関西支部活動報告

2001・1・20 (土)

「イギリス最初のベストセラー作家 Marie Corelli:『悪魔の悲しみ』(1895)とその時代背景について」 中島 剛

「いにしゑみちのさだめひと本居宣長」 津田善也

「子供の遊びと英米文学」 斎藤 勇

2001・3・10 (土)

映画『グリード』(1924)の一考察:主人公 McTeague のアンチ・ヒーロー性について  
西 善也

冷戦下「アメリカ」とウサギ 柏原和子

続アメリカ中央部について 吉川禮三

2001・5・26 (土)

John Dos Passos の One Man's Initiation—1917 における戦場描写 栗山裕也  
墮落僧の救済について: グレアム・グリーンと丹羽文雄の場合 玉井久始  
COBUILD コーパス(4億語)から見た学習辞書・参考書の記述 日比野日出雄

## 第一回日本比較文化公開講座開催のお知らせ

鈴木瑠璃子

第一回日本比較文化公開講座 — 日本文化のアイデンティティを求めて —

主催: 日本比較文化学会南東北支部 共催: NPO 法人 国際比較文化研究所

場所: せんだいメディアテーク(仙台市青葉区春日町2-1)7F 会議室

期間: 10月16日(水) — 10月18日(金) 午後6時—7時半(各一講演)

10月19日(土) 午後3時—7時半(三講演)

受講料(含む資料代): 一講演に付き 500円: 全六講演 2800円

- なお各講演後には質疑応答の時間を見込んでおります。

10月16日(水) 開講挨拶 日本比較文化学会会長 芳賀馨

「宮沢賢治とロマンティック・ヒーロー」

東北学院大学教養学部教授 鈴木瑠璃子

17日(木)「島崎藤村の西洋への眼差し」 国際日本文化研究会会長 飯島武久

18日(金)「日本人で最初に世界一周をした仙台漂民・津太夫一行と

ナジェーダ号乗組員達」

東北学院大学教養学部教授 エルンスト F. ソンダーマン

(使用言語・英語・通訳付き)

19日(土)「日韓食文化考」 元郡山女子大学教授 芳賀文子

「日本における中国陶磁の受容」

東北学院大学教養学部教授 富田昇

「支倉常長は世界に何を見たか」

東京クリエイティブ社長・写真家

日本文藝家協会・日本ペンクラブ会員 高橋由貴彦

閉講挨拶

日本比較文化学会南東北支部長 鈴木瑠璃子

問い合わせ先: 日本比較文化学会南東北支部

〒981-3198 仙台市泉区天神沢2-1-1 東北学院大学教養学部・鈴木研究室

TEL 022(773)3337 e-mail rsuzuki@izcc.tohoku-gakuin.ac.jp

受講料振込先： 郵便振替口座 18430-1536311 日本比較文化学会

\*会場と資料の準備の都合上、受講を御希望の方は、受講料を上記口座にお振込み下さい。

## 本部事務局日より

### 1. 入会希望者へ

本学会に入会を希望する方は、本部事務局へ「入会申込書」を提出して下さい。折り返し必要書類をお送り致します。入会申込書は本部事務局に備えてあります。

### 2. 論文掲載希望者へ

学会誌『比較文化研究』は年に4回発行しております。掲載をご希望の方は下記へお問い合わせ下さい。

(3月末日締切) 〒854-0081 諫早市栄田町1057

長崎ウェスレヤン短期大学 南川研究室 日本比較文化学会九州支部

電話 0957-26-1234

(5月末日締切) 〒370-0068 高崎市昭和町53

新島学園女子短期大学 前田研究室 日本比較文化学会関東支部

電話 0273-26-1155

(9月末日締切) 〒981-3105 仙台市泉区天神沢2-1-1

東北学院大学教養学部 鈴木瑠璃子研究室 日本比較文化学会南東北支部

電話 022-773-3337

E-mail: rsuzuki@izcc.tohoku-gakuin.ac.jp

(12月末日締切、欧文原稿のみ)

〒京都府京田辺市多々羅都谷1-3

同志社大学言語文化教育研究センター 山内研究室

日本比較文化学会関西支部 電話 0774-65-7070

3. 近況報告、支部活動報告、研究部会報告、新刊紹介などを『比較文化会報』に投稿希望の方は次の要領でご応募下さい。

(1) 近況報告(130字以内) (2) 新刊書、編註書の紹介(130字以内)

(3) エッセイ投稿(500字以内) (4) 支部報告、研究部会報告(1000字以内)

投稿締切日 毎年6月30日(第1回締切日)および12月25日(第2回締切日)

投稿先 日本比較文化学会本部事務局 〒036-8577 弘前市稔町13-1

弘前学院大学文学部 佐藤研究室 日本比較文化学会

電話 0172-34-5211(代) / E-mail: satoh@hirogaku-u.ac.jp

## 日中韓国民交流年記念事業「多文化交流 in ぐんま 2002」に参加して

高知大学教授 奥村訓代

去る2002年8月1日から9日の間、群馬県内において日本・中国・韓国から各10名の大学生が一堂に会し、国際交流を図った。これは特定非営利活動法人 国際比較文化研究所主催、NPO法人スピリットぐんま、NPO法人日本福祉教育研究所等共催、また、外務省、群馬県、群馬県国際交流協会、群馬県社会福祉協議会等の後援を得て行われた。

- 目的：1) 日本語・日本文化を専攻する大学生に日本文化実体験の場を提供する。  
2) 日本・韓国・中国の学生間の交流を通して多文化理解を深める。  
3) 国内外の若者に群馬を紹介し愛着を持ってもらう。  
4) 群馬在住の人々に多文化理解を考える機会を提供する。

参加者：韓国 10名 檀国大学 語文学部 (引率：片茂鎮教授)  
中国 10名 南京師範大学 外国語学院 日語系 (引率：郭常義教授)  
日本 10名 高知大学 人文学部 (引率：奥村訓代教授)

内容：ホームステイ、各種交流会、高崎祭り参加、浅草・お台場散策、、、と豊富であった。

感想：日本語で、日本文化や日本人を語るに、9日間はあまりに短かったというのが、偏らざる第一印象である。しかし、それ以上に目を見張るすばらしいものがあった。

それは、スケジュールの緻密さもさる事ながらスタッフの層の深さと連携プレイの素晴らしさであった。いろんな人々がそれぞれの視点から、他を尊重しつつ自己も忘れずに主張している構図こそ、21世紀が直面している多文化共生の原型を見る思いであった。新しい時代の来るべきスタイルを模索する人々が、たとえ10人づつであっても、日本の群馬に集結し、共に語り、あるときは熱くなりながら共有の経験を積み重ねたことことは筆舌尽くし難い業績であると言えるだろう。

「継続は力なり」の言葉通り、このようなイベントが脈々と、しかし確実に繰り返されることを願って止まない！

## 「多文化交流 in ぐんま 2002」活動報告

国際比較文化研究所所長 太田敬雄

日本比較文化学会にも共催団体として参加していただいた「多文化交流 in ぐんま 2002」は、8月1日に成田に集合するところから始まり、9日の別れまで学びと感動の連続の日々だった。連日36度を越える猛暑と最近はめっきり少なくなったと言われていた上州名物の夕立と雷が連日襲う中、参加した学生のみならず企画・実施したスタッフ、ホストファミリーやボランティアの人々にまで大きなインパクトを残した9日間だった。

奥村先生も引率者の立場から感想を寄せて下さったが、多くの学生達もメールや手紙で感想を語ってくれている。その中から中国の学生が寄せてくれた感想の一部を紹介しておく。

「(前略)日本にいたこの九日間がすごく短かったんですけども、ほんとうに夢のようにすばらしかったです。日本、韓国、中国の大学生と一緒に座って話し合ったり、一緒に(略)見学したり、一緒に食事をしたりしました。(略)日本語という同じ言葉、21才・22才という同じ若い年のおかげで、国と国の区別がすぐなくなって親しい感じができました。(略)これはこん度の「多文化交流 in ぐんま」の特色と一番よいところだと思っています。という、二つの文化の間の交流と違った「多文化交流」を体験することができるということです。これは(略)将来国際的な経済や文化交流のない手になる学生にとっては、実にありがたい経験だと思っています。」と記してくれた王春雨さん。彼女は今回の体験を通して「お互いの理解があってからこそ、国と国の交流がもっとよくできるわけだと私はいま信じています。」との理解に到達したと記してくれた。(引用は原文のまま)

参加した学生は成田までの往復旅費の他、プログラム実施経費の一部として参加費も払って

の多文化交流体験であったが、もちろん参加費だけで必要経費をまかなうことは出来ず、善意の募金に頼るしかなかった。

そのような状況の中で、大きな力になったのが日本比較文化学会の共催。もちろんこれは名義共催で、学会からは一文の募金も頂いてはいない。しかし、大勢の学会員の方々が、このプロジェクトを理解し積極的に募金に応じて下さった。学会と、募金に応じて下さった会員の皆様への御礼の気持ちを込めてここにごく簡単にはあるが会計報告をさせていただきます。

収入：寄付 96.4万円、 学生参加費 59万円、 広告掲載料 46万円、  
一般参加費 18万円、 研究所負担金 10.9万円、 収入計 230.3万円  
支出：会場費・通信費・事務費 22.7万円、 広告宣伝費 14万円、  
食費（含歓迎会等） 44.4万円、 宿泊費 87万円、 交通費 41.4万円、  
謝金 16万円、 雑費（含保険料） 4.8万円 支出計 230.3万円

すでに準備の始まっている「多文化交流 in ぐんま 2003」が、次代を担う若者のための、さらに熱き交流の場となるよう、学会員各位のさらなるご支援をお願いする次第である。

## エッセイ 「崇福寺の中国盆について」

伊東秀征

長崎市鍛冶屋町の崇福寺は中国福建省出身の華僑の菩提寺であるが、この唐寺で毎年旧暦七月二十六日から二十八日にかけて中国盆が盛大に行なわれており、この場を借りて簡単にそれを紹介してみよう。

三門(竜宮門)をくぐり長い階段を登ると、第一峰門に到達するが、ここでその脇に置かれている白と黒の人形をまず見られたい。白い人形は「七爺」、黒い人形は「八爺」といい、それぞれ山で死んだ霊、海で死んだ霊を表すが、よく見るとなかなか可愛らしい。

次に第一峰門をくぐると、大きなパネルに描かれた閻魔大王が出迎えてくれる。また境内には、霊が滞在するという「五堂」(女室、男室などのミニチュアの建物)や、買い物をするという「三十六軒堂」(米屋、魚屋などの店舗のパネル)が設けられている。

ところで、中国盆のハイライトは最終日である。この日の朝、「十錦菜」という十四種類の精進料理が境内に供えられるが、夕方になると、豚の頭や魚介類なども加わる。そして夜に入り、爆竹が鳴り響く中、あの世のお金を表す「金山」や「銀山」が燃やされ、中国盆は終りを告げるのであった。

## 編集後記

7月3日に成沢先生を経由して、10月に開催される講座案内を南東北支部長の鈴木先生よりいただきました。ところが今年はその後本部を初めとしてどこからも全く原稿が入ってこず、待っているうちに8月になりました。8月は私自身が留守をしますので、出かける前に本部に問い合わせたところ、佐藤先生より9月15日原稿締切というお知らせを頂き、秋風が立つころの発行となりました。発行が遅れましたことを、会員の皆さまを初め、早々に原稿を頂きました鈴木先生、成沢先生に深くお詫びいたします。(中澤紀美子)

本部事務局

〒036-8231 弘前市稔町13-1  
弘前学院大学英米文学 佐藤研究室  
Tel. 0172-34-5211 内線 216

発行者 芳賀 馨

編集者 中澤 紀美子